

年間第 15 主日

種を蒔く人

マタイ福音書 13 章 1-9

その日、イエスは家を出て、湖のほとりに座っておられた。すると、大勢の群衆がそばに集まって来たので、イエスは舟に乗って腰を下ろされた。群衆は皆岸辺に立っていた。イエスはたとえを用いて彼らに多くのことを語られた。「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種は茨の間に落ち、茨が伸びてそれをふさいでしまった。ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。耳のある者は聞きなさい。」

《弟子たちはイエスに近寄って、「なぜ、あの人たちにはたとえを用いてお話しになるのですか」と言った。イエスはお答えになった。「あなたがたには天の国の秘密を悟ることが許されているが、あの人たちには許されていないからである。持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。だから、彼らにはたとえを用いて話すのだ。見ても見ず、聞いても聞かず、理解できないからである。イザヤの預言は、彼らによって実現した。

『あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。この民の心は鈍り、耳は遠くなり、目は閉じてしまった。こうして、彼らは目で見ることなく、耳で聞くことなく、心で理解せず、悔い改めない。わたしは彼らをいやさない。』

しかし、あなたがたの目は見ているから幸いだ。あなたがたの耳は聞いているから幸いだ。はっきり言うておく。多くの預言者や正しい人たちは、あ

なたがたが見ているものを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞いたかったが、聞けなかったのである。だから、種を蒔く人のたとえを聞きなさい。だれでも御国の言葉を聞いて悟らなければ、悪い者が来て、心の中に蒔かれたものを奪い取る。道端に蒔かれたものとは、こういう人である。石だらけの所に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて、すぐ喜んで受け入れるが、自分には根がないので、しばらくは続いても、御言葉のために艱難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう人である。茨の中に蒔かれたものとは、御言葉を聞くが、世の思い煩いや富の誘惑が御言葉を覆いふさいで、実らない人である。良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて悟る人であり、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶのである。」》

きょうのテキストは種まく人の譬です。ときどき、まかれた種の譬、道端にまかれた種、石だらけ、茨（いばら）の中、種の蒔かれた土地のいい悪いの譬として語られることがあります。素直にテキストを読めば、種まきは苦勞が多い、まるで無駄なことをやっているようだけど収穫はいっぱいある、豊作なんだということが書いてあることに気づきます。イエスがこの譬を通して語りたこととはなにか、イエスは農業指導員ではないのですから、種をまく時にはこうしろ、ああしろ、と指図しているわけではない。イエスが語ることは福音、よい知らせ、Goodnewsです。神の子イエスはわたしたちに語ること、それは第一に神の国、御国のことです。

<悪い土地にまかれた種？>

イエスは神の国が来た、神の国は到来した、ということを宣言して宣教を開始しました。この流れでこの譬えを読めば、種まきにはいろいろ苦勞は多いけれど刈り入れ時には100倍だ、豊作になるんだ、ということを単純に知っているんだということになります。でもイエス自身の解説では、御国のこと

ばを聞いて悟らなければだめなんだというように、聴くときの態度の説教をしているようです。道端に蒔かれた種のようにってはダメだ、石だらけもだめ、茨もダメ、よい土地にまかれた種のようにならなきゃいけないよ。

まったくもってそれはそうなんです、ハイ分かりました。これから説教は一番前の席で聞きます、居眠りはもうしません、毎週欠かさず礼拝に出席します、イエスはまじめに聞けよということをおの警で語っているのでしょうか。

イエスの宣教のおわり、つまりエルサレムの受難では弟子たちはみんな逃げてしまい、イエスに味方する者は一人もなく、ただ一人で十字架につけられます。12人の弟子も最後には一人が裏切り残った11人も逃げ去り、一時は5000人もついてきた群集はどこかにいなくなり、最後に十字架につけられたイエスを遠くから見守ったのは何人かの女だけだったと福音書にはあります。最後に残った幾人かの女たちだけがよい土地にまかれた種だったのでしょうか。ほかの者たちはそれぞれに道端、石だらけ、茨の中と譬えられる悪い土地にまかれた種だったのでしょうか。イエスの口から直接みことばを聞いた者たちのほとんどは悪い土地だったのか。

<耳のある者は聞きなさい>

イエスがいう聞く耳とはなにか。

これをことばどうりに単純に受け取って説教を聴くときの心構え、みことばを聞くときには耳をそばだてなさい、と受け取るか、それともイエスと同じように神からのみ霊をもってこの譬を聞き取りなさい、と受け取るか。このイエスの戒めは言葉どおりではなく、イエスの語ることばに隠されている深い意味を汲み取るほうがいいと思います。聞く耳とはみ霊に満たされて聞くこと、聖霊の助けを得て聞くということです。聞く人がこの譬を語るイエスと同じ気持ちになってこの種まく人の譬を聞けば、わかる。これは理屈で分かるということではなく、直感でわかる。頭で分かるのではなく、からだで

感じる、はらで分かるということです。神のみ霊、つまり聖霊が分からせてくれるということをいっています。

聖霊をとおしてこの「種まく人の譬」を聞くとどのように聞こえるのか？それはみさなん一人ひとりに違いがあるはずで、それはあたりまえなこと、わたしたち一人ひとりにはそれぞれに違いがあり個性があるからです。

<さいごに>

以下にヨハネ福音書と第一コリントから「種」に関する聖書箇所を紹介してきょうの結びとします。

一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。

ヨハネ 12:24b

この福音のみことばをきょうのテキストに当てはめてみると「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のまま」つまり、道端や、石だらけや、茨の中では「地に落ちて」死んではいない種のまま、一粒のまま、つまり収穫はない、ということです。「だが、死ねば、多くの実を結ぶ」よい土地にまかれた種は多くの実を結ぶ、きょうのテキストで言えば、豊作だ、100倍だということです。

種が死ぬ、不吉な言い方ですが、よい土地にまかれた種のこと、つまりきょうのテキストの譬ではよい土地に落ちた種です。

わたしたちは死ぬべき人間としての定めがあります。その一方でイエスは神が与える復活のいのちを説き、かつご自身で神の栄光をあきらかにされました。イエスは復活しました。その復活者キリストを信じてキリストに結ばれて生きる者は聖霊によって神から新しい生命を受けています。しかし、神からの生命はそれにふさわしくないからだに宿っています。生まれながらの人間の本性につきまとう罪のためにこの肉体は死に定められています。

ということは、神の種は悪い土地に落ちている。

この譬をわたしたち置き換えてみると、死ぬべきこのわたしの体に落ちてい

ます。

しかしそれが神からの生命である以上、畑に豊かな収穫が来るように、必ず豊かな栄光の中に顕れる時が来ます。「だが、死ねば、多くの実を結ぶ」それが復活です。神は御自身に属する者たちに、神からの新しい生命にふさわしい別の体を与えられます。キリストに属する者は、イエスが復活されたように「霊の体」を与えられて死人の中から復活します。パウロは「どんな体で復活するのか」という批判に対して種の比喻をもって答えています。

愚かな人だ。あなたが蒔くものは、死ななければ命を得ないではありませんか。あなたが蒔くものは、後でできる体ではなく、麦であれ他の穀物であれ、ただの種粒です。神は、御心のままに、それに体を与え、一つ一つの種にそれぞれ体をお与えになります。 第一コリント 15:36-38

イスラエルの歴史の中に隠されていた「神の国」は、イエスの中に実を結び世界に出現しました。しかしイエスの中に到来した「神の国」は、2000年たった今も世界の不信と敵意の中に埋もれ隠されています。けれどもそれは神の業であるから、必ず豊かな栄光の中に顕現することになります。今わたしたちがキリストにあって賜っている神の生命も、この朽ちるべき体の中に隠されているが、それは必ず復活の栄光の中に顕れて「神の国」は最終的に成就します。御国はかならずやってきます。
